

— 忙しい時ほど… —

校長 稲田 正平

11月2日（火）は、いい天候の下で体育祭を実施することができました。緊急事態宣言の影響により9月から期日を延期しての実施でしたが、部活動対抗リレーを復活させるなど、できるだけ例年に近い形での体育祭となりました。コロナ禍の影響で実際の準備期間が短かったとはいえ木崎中生の一人ひとりが主役となって活躍した姿が随所に見られました。昼休憩中に何人かに声をかけると「楽しい」や「優勝したい」などの意気込みも聞かれました。逆に閉会式での結果発表後に「口惜しさ」を口にする人もいました。「楽しい」「優勝したい」などは体育祭に満足をしているからであり、「口惜しい」というのはそれだけ一生懸命に競技をしたからこそ出てきた言葉なのでしょう。そして閉会式ではマスク越しながら立派に校歌を歌いあげた木崎中生に何か頼もしさも感じました。

さて、今日から12月です。旧暦の12月は「師走」と呼ばれていました。語源は諸説あるようですが、広く知られているのは「僧侶（師）のように普段落ち着いている人でも、この月になると走り回るようになる」という意味から「師走」と呼ばれるようになったという説です。仏教では12月に「仏名会」という法要があり、また昔の日本では正月前に祖先の霊を弔う習慣があったそうでお坊さんにとってはとても忙しい月でもありました。そこで「師匠である僧侶がお経をあげるために東西を馳せる月」という意味の「師馳す（しはす）」という言葉があったようです。この「師馳す」は平安時代の末期の民間語源とされ、現代の「師走」はこの説をもとに字があてられたと考えられているそうです。また、ご存じの方も多いでしょうが「忙」という漢字は、「心」を表すりっしんべんと「うしなう、なくなる」という意味をもつ「亡」からできており、「いそがしい、ひまがない」という意味をもつようになっています。因みに、「慌」も同じような成り立ちで、「意識を失う、気が抜ける、落ち着きなく忙しい」などの意味があるようです。忙しく、慌ただしく余裕のない日々を過ごしては、こうした時についてうっかりミスをしてしまったり、気持ちに余裕がなくなり言葉がきつくなったり…ということも見受けられます。12月の忙しさに心を奪われて、また忙しさのあまり、子どもに目を向けることを忘れてしまっただけなら健全な子どもの成長は望めません。私たち大人はつい「忙しいから…後で」と子どもに言っただけで済ませがちです。しかし、「忙しい」を理由に子どものことを後回しにしてしまっただけなら後悔することも多いものです。また子どもが中学生になると、安易に「忙しいから…」と相手にしないでおくと、大人の勝手な都合を見透かされ、子どもとの関係も険悪になることもあります。「忙中閑あり」ではないですが、どんなに忙しくても隙間の時間はあるはずで、忙しい中でもゆとりをもって過ごしたいものです。学期末を控え忙しくなるころではありますが、我々教職員もゆとりをもちながら日々の教育活動を進めたいと考えています。

新型コロナウイルス感染症の感染がかなりの減少傾向とは言え、第6波も懸念されている状況ですので、保護者の皆様、地域の皆様も感染予防に努めながらお過ごしください。